

偶感あれこれ

5
「運」について

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

仏教企画通信

発行日 | 平成29年9月1日 **49**号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989

発行人 | 21世紀の仏教を考える会代表
佛仏教企画代表 藤木隆宜

Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

一九八五(昭和六〇)年八月二日、一八時五十六分、日本航空のジャンボ機が群馬県南西部の御巢鷹山の尾根に墜落した。死者五二〇人という大惨事であった。三二年前の出来事であるが、現地からのテレビ放送に夕飯をとるのも忘れて釘付けになっていたことを、私は今でもありありと覚えていて。このとき奇跡的に助かった人が四人いた。そのひとり、大怪我をした女子小学生がヘリコプターに吊り上げられるのを目にしてホッとすることも忘れられない。原因は航空機メーカーの米ボーイング社による尾翼の修理ミスであるとされた。墜落機に乗るはずの人が遅れてしまい命びろいしたとか、チケットが取れず別の飛行機に変えたため死を免れたといった話でメディアは一杯であった。この大事故で助かった人たちが関係者たちの多くが口にしたのは「運がよかった」という言葉であった。犠牲になった人たちは「運が悪かった」とか「運のない人」とされたようである。

「運よく合格した」とか「運よく手術に成功した」とか、今日でも日本人は日常生活の中で「運」の語を多用しているように思う。ところが日常生活において多用される語でありながら、改めて「運」についてと訊かれたら、答に戸惑う人は決して少なくはない。職業や仕事の種類により、意味内容に差はあるにせよ、「運」の語は老若男女を問わず生活のなかで使わずにはいられない語の一つであることは間違いない。日本人の誰もが普通の会話のなかで多用しながら、意味が必ずしも明瞭ではないのが現実である。「運」は、詮索してみるに価値する語ではあるまいか。ことに人生の究極の問題を扱う宗教者においておやである。

「運」の語義

まず『国語辞典』の「運」に当たってみると、この語の意味は、①と②に大別され、①は①と②に、②は①、②、③に分別されている。①の①は「めぐること。はこぶこと。移すこと。」「運行」「海運」とあり、②は「うごかすこと。はたらかせること。」「運転」「運営」となっている。②の①は「天命。方丈記「おのづから短き運をさとりぬ」、②は「めぐつてくる吉凶の現象。幸・不幸、世の中の動きなどを支配する人知・人力の及ばないなりゆき。まわりあわせ。」「運が悪い」「運のよい人」「運命」「不運」と記しており、③は「特によいめぐりあわせ。幸運。」「運が向いてくる」とある。本稿で大事なのは②の①、②、③であることは言うまでもあるまい。「運命」は「人間の意志にかかわらず、身の上をめぐる吉凶禍福。それをもたらす人間の力を超えた作用。人生は天の命によって支配されているという思想に基づく。めぐりあわせ。転じて将来のなりゆき」であると説明される(『国語辞典』)。「運命」は、この人生は天の命によって支配されているという思想に基づいて成ったものとされるが、それでは「天の命」≡「天命」とは何かとなる。①「天命」とは、「①天Ⅱ上帝の命令。②天によって定められた人の宿命。天運。」「人事を尽して天命を待つ。」「③天から与えられた寿命。天寿」であるとされる。最近では「天運」という語はあまり用いられないようだが、「宿命」(前世から定まっている運命。「運命」の語はよく使われているように思う。以上に述べたように「運」や「運命」とその類似語は、多くの場合、人びとの限界状況あるいは切羽詰った状態において用いられる語であり、社会全体が安定しているときにはそれほど必要とされない言葉であるように思う。

私が小学校に入学したときに日中戦争が始まり(一九三七年)、中学三年生のときに敗戦を迎えた(一九四五年)のだから、私はまさしく「戦争つ子」という「運」を担った人間の一人であるとも言えよう。あの辛かった戦争時代を体験した人びとは当然ながら年々減っている。多感な年頃に大戦争を味わった者は、その実情を後の世代に残しておく使命をもつのではなからうか。それは「不運」や「悲運」を「好運」に転換させる努力の一環であるとも考えられるからである。もつとも今振り返ると、あの戦争時代の大人たちは突然の徴兵令・動員令により、先の全く読めない兵役に強制的に就けられる現実をみずからの「運命」と観念していたようにも思う。

小学校の二、三年生になると、村や町の人たちが赤紙(徴兵令告示書)を受けて故郷を出発する際、先生に引率されて駅まで見送りに行かされた。送る大人たちは竹竿に吊した何本もの幟を手にしていたが、その幟には「武運長久」とか「皇運降昌」の大文字が墨痕鮮やかに書かれてあった。徴兵された兵士たちは「お国のために戦ってきます」などと簡単な別れの挨拶をした。その兵士たちを前に私たちが声



藤木 禅文化をテーマにお話をすすめたいと思いが、まず吉岡老師から、禅の歴史について、お話をしていただけだ。

吉岡 禅というのも仏教の一つですから、お釈迦さんから始まるわけで、お釈迦さんは坐禅によって悟りを得た、それが仏教の基です。今回いろいろ中村元先生の本を読んできましたが、『インド人の思维方法』『シナ人の思维方法』『日本人の思维方法』、昭和三十六年に春秋社から出た、これは名著ですけども、ただインドの形而上学といいますが、インド人特有の瞑想的、哲学的な考えというのは難しいので、抽象的すぎますのでインドの仏教もあまり庶民には届かなかったと思います。五世紀ぐらいになって、インド人の達磨大師がお釈迦さんの教えを中国へ持ってきた。いろいろ本を出して、『二人四行論』という論理的な本がありますけれど、そこから今度は中国人の考え方、中国の風土と相まって、中国で仏教、禅が広まった。あとは皆さんご承知のとおり、達磨さんのあと二代目(天祖慧可)、三代目(鑑智僧璨)、四代目(天医道信)と来て、その人たちが日常、中国人の庶民の間に禅を広めていったわけです。道元禪師のお師匠さんである如浄禪師が十一世紀ごろですか、この間五、六百年、中国人の日常生活の中に禅が入って

座談会・禅文化
書を通して
先人の精神を受け継ぐ

道元禪師はもとより
月舟宗胡、天桂伝尊、風外慧薫の
その精神を受け継ぐ気持ちで
墨蹟に向き合いたい

吉岡博道
鈴木潔州
平川恒太
藤木隆宣司会

師の許を訪ねて印可を受け帰国する。また今度は道元禪師の伝えた禅が日本人の考え方と合ったというか、ある程度合うところがあった、それで禅が広がってきたわけです。私の言うのは禅の中の曹洞禅ですが、そのほかに臨済禅というのがあります。曹洞宗というのは今、非常に大きな宗派になって全国津々浦々にあります。一万五千人、マンモス教団ですけども、

果たして内面的な文化面、禅文化の面について曹洞宗はどう思っているか。私は、それは一言で言うて関心が、それは少しか思えない、曹洞宗としての関心は希薄です。ですから私たちは、二十年前ですか、曹洞宗の禅文化というのがあらずだ、これをもっと高揚していこうということ、

「禅文化・洞上墨蹟研究会」を結成したわけです。最初は名前の通り、曹洞宗の墨蹟を中心にやってきましたが、このごろは会報を年に一回出してはいますが、お茶のこと、お花のこと、庭園のこと、建築のこと、文学・漢詩のこと、精進料理のことなど曹洞宗から発生しているさまざまな文化面を取り上げるようになりまし。私が会長ここにいて鈴木老師に事務局長を務めてもらっています。

日中友好の
僧侶書画展

藤木 鈴木老師は先ごろ中国の湖北省図書館で、日中の僧侶の書画展を開催されたとのことですが、これはどういう経緯で実現の運びになりましたか。

鈴木 それはまず五年ほど前ですが、東北福祉大学の学長でいらっしゃる大谷哲夫先生を会長に「国際(日中)禅文化交流協会」を立ち上げました。その基といえます。実は今お話になった吉岡老師の「禅文化・洞上墨蹟研究会」なんです。曹洞宗は大きな教団ですが、正直申し上げまして、禅文化に関して臨済宗や

第です。日中あわせて、百幅ぐらい展示をさせていただきます。そのうち日本曹洞宗の墨蹟となりまして、月舟宗胡、山道白はじめ古仏のもの、現在の僧侶の方のとで五十幅ほど出させていただきました。吉岡博道老師、大谷哲夫老師、東隆眞老師、山岸弘文老師、栗谷正光老師ほかの方々に御出展いただき会を開きましたら、中国側から今度はぜひ中国でやってもらいたい。ただ、ご存じのように今は政治的にこういう状況が続いております。懸念もありましたが、それはそれとして、民間交流をどんどん続けたいと、大谷会長が決まられ吉岡会長の指示の下に「墨蹟研究会」から軸の提供ということで協力をして中国での展覧会が実現。大谷



中日禅文化書画交流展(中国の湖北省図書館にて)

高く歌ったのは、「天に代わりて不義を撃つ 忠勇無双の吾が兵は 歓呼の声に送られて 今ぞ出でたつ父母の国形は生きて還(帰)らじと誓う心の勇ましき」という威勢のよい歌であった。八十年近く経っても脳裏を離れないのは、戦争というものが持つ強烈な力ゆえではなからうか。「万歳!万歳!」の声で送りだされた人たちの多くは故郷に戻ることがなかった。戦場で斃れた人たちは「武運つたなく」逝った人として「武運つたなく」の「つたない(拙い)」という語には三つの意味がある。①巧みでない、②能力・品格が劣っている、③運が悪い、薄命である(「広辞苑」)。「武運つたなく戦死した人」は右の三つの性格を具えた人であるとすれば、何とも気の毒この上なしではないか。戦死した人たちは、村や町を挙げて葬送された。葬儀の際に自治体の長が読みあげる弔辞には「武運つたなく戦死せらる。嗚呼悲しい哉」という表現が多かった。「運」がよければ戻ってこれたのに」との願望が籠められている。「運」の語が一般・普通の言葉では表現し得ない微妙かつ不条理な心情や状況を秘めている証左である。



「運」の諸相

俳優の紺野美沙子さんは大相撲が大好きで、本年初場所に優勝し横綱昇進をはたした稀勢の里関のファンであるという。彼女は稀勢の里が優勝したのには「運」があったと述べる。彼女はこう語る。「二横綱(鶴龍と日馬富士)は対戦前に休場し、大関豪栄道には不戦勝。初優勝に向けて周りがお膳立てしてくれた状況でした。運を味方にするのも力のうちです」と(朝日新聞「二〇一七年二月十日(金)」)。ここで紺野さんが言う「運」とは本人にとって有利な状況の現出のことである。具体的には本人の意図に関係なく「周りがお膳立てしてくれた」ことである。さらに彼女は「そもそも大相撲自体が非日常的で、そこが好きです。スポーツでありながら、伝統文化や神事を担う」と述べる。鋭い指摘である。毎場所初日の前日に衣冠束帯姿の行司さんが土俵の中心に穴をあげ捧げ物を埋め、神酒を注いで礼拝するのにもその例と言えよう。まさに「運」の語義について述べた際に「人知・人力の及ばないなりゆき」と記したが、紺野さんの言う「運」もそういう事態を示しているように思われる。大相撲は格闘技であり個人の勝負を目指す戦いの一つであることは言うまでもない。これにたいして戦争は国家間の格闘であり掃攘行動である。ここで再び戦争時代の

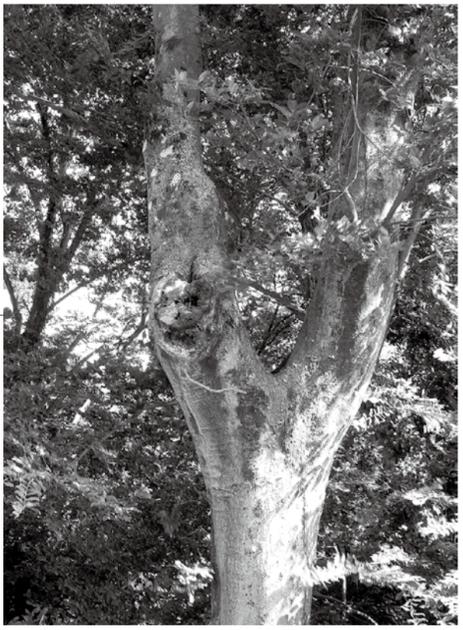
「運」について述べよう。日露戦争のことである。この戦争は一九〇四年(一〇五年(明治三七(三八))に日本が帝政ロシアと満州・朝鮮の制覇を狙って争った戦争であった。一九〇四年二月に国交断絶、同年八月以降旅順攻囲、〇五年三月の奉天大会戦、同年五月の日本海海戦などにおける日本の勝利を経て、同年九月当時のアメリカ大統領セオダール・ルーズヴェルトの斡旋によりポーツマスにおいて講和条約が成立した。講和の決めでとなつたのが、日本海における日本の大勝利にあったことは、よく知られている。この海戦においても日本が勝利したのは「運」によるという。海戦は一九〇五年(明治三八)五月二十七日から翌二十八日に行われ、日本海軍の対馬沖で行われたが、連合艦隊司令長官東郷平八郎が率いる艦隊がロシアのバルチック艦隊を全滅させ、世界を驚愕させた出来事であった。

戦後に、艦隊の参謀であった佐藤鉄太郎(当時海軍中佐、戦艦出雲に座乗)は「勝利したのは「運」でしょう」と語り続けたという。ある海軍の将官からあれほど完璧な勝利を完璧な形で生みあげたのはなぜかと問われた佐藤は、「六分どおり「運」でしょう」と答え、「ではあと四分は何かと訊かれると、「それは何と「運」でしょう」と語ったという。佐藤はこの説明のつかない「六分の「運」について、海軍大学校において次のように説いたとされる。「東郷長官はふしぎなほど「運」のいい人であった。……妙なことをいうようだが、主将がいかに天才でも「運」のわるい人はどうにもならない」と。日本海海戦において、いろいろな点で東郷の知恵袋であったのが参謀の秋山真之中佐であった。秋山は海戦のあり方を計画・立案した人物で、のちのちまで天才と賞讃された男であるが、海戦中の三笠艦上で敵弾で負傷したり戦死した兵の姿を目にし大変ショックを受け、体中が慄えだすような思いに落ちこんだという。海戦後、彼は海軍を辞めて出家し僧になることを本気で考え、実際に行動にでた。しかし彼の友人たちが懸命に押しとどめたため思いとどまりはしたものの、戦後に出生した長男の大を僧にすべくしつこく教育し、病没するとき(一九一七・大正七)、かたくなにそのことを遺言したという。大は長じて無宗派の僧となつた(日露戦争については司馬遼太郎著『坂の上の雲』八巻に拠った)。秋山は四国松山の出で俳人・歌人として知られる正岡子規の同級生であり、文才も相当のものであったらしい。東郷平八郎がバルチック艦隊が日本海に向かっていることを知ったとき、東京の大本営に「敵艦見ユトノ警報二接シ、連合艦隊ハ直ニ出動、之ヲ撃滅セントス」というのであったが、秋山はこの文に「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」と付け加えた。司馬遼太郎は「これによって文章が完璧に

なるというだけでなく、単なる作戦用の文章が文学になつてしまった観があった(司馬前掲書)と書いている。秋山の文章が最後まで残る名文とされるゆえんの一つは、文学者子規と親友であったことにもあろうと思われる。この名文を生んだのもまた「運」と言えるのではなからうか。つぎにはまことに恐縮ではあるが不肖私のことについて触れてみたい。私は生来虚弱児で、とくに小学生までの頃は年中病院通いであった。両親も祖母も伯父もみな肺結核で亡くなっていた。戦前とくに昭和初期には結核は「肺病」と呼ばれ、「ハンセン病(癩病)」と並んで人びとに恐れられる病であった。肺結核の患者のいる家の前を通るときには口を手で塞いで走り足で通つたものである。結核患者は「肺病たかり」と言われ、蔑まれた。明らかに差別行為なのだが、病人は健康な人たちからみると「運の悪い」人

たちであつたのであろう。私も肺結核一族の一人であつたから、物心ついた頃から大学時代にかけて「結核」が頭から離れることがなかった。年に一度はレントゲン写真で胸部を診た。そうした結核コンプレックスから解放されたのは中年になってからである。今でもレントゲン写真を損ると二ヶ所ほどかつて結核菌に冒された痕があると医者に指摘される。両親や親族からの遺産であると思つている。内臓のあちこちに悪いところはあつたが、こうして米寿近くになつても原稿を書いている自分分は、早く逝つた両親のお蔭であり、仏菩薩の守護ゆえであり、また「運」であると思つている。

冒頭でも記したが『方丈記』で「人生無常」を諷いあげた鴨長明も、「おのづから運をさとらぬ」と記していた(岩波文庫、二七頁)。彼にとつて「無常」は「運」であつたのであろうか。





平川恒太氏

会長と私と十数人で湖北省へ行つてまいりました。向こうの方は非常に熱心で、率直に言つて驚きました。というのは、私も日本では何回かそういう会をやりましたが、観に来られる方がある程度、高齢の方が多く、ところが、中国では若い人がたくさん来て、非常に熱心です。中には写真を撮りたいという希望があり、結構です、よろしければ撮ってくださいという、皆さん自分のカメラなり携帯なりで撮られたのですが、熱心さのあまり身を乗り出す人もいてガードマンに制止されるという、日本ではなかなかお目にかかれない光景でした。江戸期に描かれた道元禪師の頂相を持つていたら、皆さんよくご覧になっていました。日本では、これは道元さんだねといった感じで通り過ぎますけれど、身を乗り出して一生懸命、費を自分たちなりに読んで写真を撮っているそんなことで、中国で熱心に受け入れられたということ、仏教が一つの共通項として大きな役割があり、日中の関係

の中でも、日本の禅文化がよいよ日中交流の場の一つになったかなと思います。そして、その中心の役割をこの書画展が果たした、それは大変意義深いことと、大谷会長をはじめ会員の皆さん方もそういう感想を持って帰ってきたところですよ。

—— 禅文化に対する世界の関心 ——
藤木 向こうの若い人たちの関心の高さというのは、何か背景みたいなものはありますか。
鈴木 一つには、仏教が盛り上がりを見せているというところではなからうかと思えます。やはり向こうは経済が非常に良くなって、中国の仏教寺院もほとんど復興しています。それが今回の墨跡展への関心の基になっているのではないのでしょうか。
もともと何年前かに「国際（日中）禅文化交流協会」で中国へ行つたとき、四祖寺というお寺を訪ねたことがありますが、このお寺の先代が浄慧法師という人で、生活禅という



中国仏教会会長學誠師の書

の中でも、日本の禅文化がよいよ日中交流の場の一つになったかなと思います。そして、その中心の役割をこの書画展が果たした、それは大変意義深いことと、大谷会長をはじめ会員の皆さん方もそういう感想を持って帰ってきたところですよ。

の提唱して爆発的ブームになったそうなんです。その浄慧法師が亡くなって今年で九四年ということですが、あるいはその四周年の一環として日本でもやっている書画展をと、私もその会のように声がかかっているのが実情ではないかと思えます。浄慧法師の活動する場所が、私はその辺はあまりはつきり知りませんが、私も、湖北省なども関係していたのではないかと。そんなふうには感じていません。藤木 そうですか、なるほど。そうしますと同じ書画展の、日本での反響はいかがでしたか。

私を感じております。吉岡 風外慧薫の話が、臨済宗では妙心寺派展、南禅寺派展とか白隠展、仙厓展とかあちこちでやっています。曹洞宗はほとんどやらないう、たまに福井で永平寺展をやるくらいです。總持寺でも遠忌に因み展覧会をしたそうなんです。そこでたまたま平成三十年は風外慧薫の生誕四百五十年にあたるということ、風外さんの遺墨展を企画しました。この人は宗門で、白隠や仙厓に匹敵する人物だと思います。江戸初期の人ですが、町の流れをくんでいる絵描き、そういう僧侶です。
鈴木 吉岡会長の下「禅文化洞上墨蹟研究会」の主催で、東京・群馬・小田原で展覧会を行う予定です。風外さんについてはまたあとでお話します。

ましたね。禅に対する関心というのは美術の中でもとても深まっています。現在の日本美術の基盤は明治期に作られました。岡倉天心やアーネスト・フエノロサによって伝統的日本美術の保護を目的に東京美術学校が建てられました。一方、書や文人画などは含まれず日本画も西洋画の影響を受け伝統的な大和絵とは変化して行きました。書道などの「道」といわれるものは西洋美術の考えからすると精神や宗教と結びつきが強くフエノロサや当時の東京美術学校の意図に合わなかったでしょう。戦後、東京藝術大学に名称が変わったから書道科は作られず現在に至ります。明治以降の美術は、西洋の文化が多く入って来て西洋を模倣する形で発展して来ましたが、現代それも限界を迎えようとする文化の基盤を見ようとする動きがあるかと思えます。そういった中で禅文化などにあるために関心が向いていくというのはよくわかります。
鈴木 もともと書画とか墨蹟というのは教化の一つの手段ですね。われわれが檀信徒に直接お会いして、いちいちお話ができればいいわけですが、なかなかそうはいけません。ですから、藤木老師のように「曹洞禅グラフ」のような雑誌を作つて、皆さんにぜひ読んでもらいたいということになる。そこで平川

日本美術の土台は不安定
藤木 平川さんには「曹洞禅グラフ」の一三七号（二〇一六年夏号）から表紙絵をお描きいただいたいております。多摩美術大を出られて東京藝大の大学院へ進まれた。二〇一二年にゴールデンコンペティションのゴールデン賞を受賞、ドイツに留学もなさっていらつしやるとのことですが、いかがでしょうか。禅といものがついてどうお考えになりますか。
平川 今お話の雪村の大規模な展覧会があり、国立博物館の茶の湯展、また出光美術館では茶の湯のうつわ展をや

さんの表紙画ですが、達磨像あり、涅槃像あり、浄土の世界があつて、今回はお盆の懐かしい風景と、素朴なようにして仏教や禅文化をきちんと発信しているものと、毎号楽しみに見ております。これは藤木老師からテーマを決めてお願いしているんですか。
藤木 実を言うと、毎号こういうものを描いてくださいとお願いしているわけではなく、春夏秋冬の季刊ですので、そういう面では平川さんが勉強されて。
鈴木 とすると、今度何を描いて来られるか、楽しみに待っているわけですね。
平川 先ほど、庭園も禅文化の一つというお話がありました。私が、僕は作庭家の重森三玲の私家本というのを持っています。
吉岡 限定版みたいなの。平川 本当に知り合いだけに配つたような、一筆入れて配つたようなのです。それを古本屋でみつけて。
吉岡 豪華本ですか。
平川 いえ、そういうのでは

園というの禅文化ですね。吉岡 岸和田城の庭とか東福寺の庭、重森さんの代表作です。吉岡 重森先生の話が出てくるとは思わなかった。
平川 そうですね。藤木 禅僧の書を具体的に取り上げてみたいと思います。吉岡 天桂伝尊は江戸時代の中期の人です。永平寺では毎朝のお勤めで、天桂伝尊大和尚と言つています。月舟宗胡大和尚、卍山道白大和尚、面山瑞方大和尚、そういった『正法眼蔵』を講釈した人のご回向しているわけです。この人の書はあまり残っていないので、私も残るところから手にいれましたが、大枚をはたきました。字もきれいで、読みは「ほんらいむいちもつ」、人間、もともと無一物で、裸で生まれてきた。それが名譽とか地位とか、いろいろ尾ひれが付いて自分は偉いもの、だと思つたりする、



天桂伝尊「本来無一物」

欲張つていろいろなものを身に付けるけど、また最後行くときは無一物で帰るんだよと、鈴木 檀信徒に教化でお話するなんていうとき一番いいですよ。吉岡 分かりますよ、誰でも読めると思っています。鈴木 これは大変珍しいものですよ。吉岡 鈴木さんも私に劣らないうえん気が高いです。よく吉岡会長天桂さんの書を落手されましたね。吉岡 天桂地獄という言葉がある。天桂さん、面山さんの『正法眼蔵』の解釈に異論を唱えた。そういう解釈は違ふよと、平たくいうと相手を攻撃したわけですよ。『正法眼蔵辨註』という本の中で、その激しさもあって、天桂地獄というあだ名が付いた。ですから、怖いような人を連想しがちだけれども、字はまとまっていますね。いわゆる書き殴つたものではない。書は人を表すと言うけど、こういう書を見ると字と人とは違ふかなと思つたりする。そのへんちよつと分からないうえん、天桂さんの著述は今でも時々、古本屋へ出てきます、和本です。



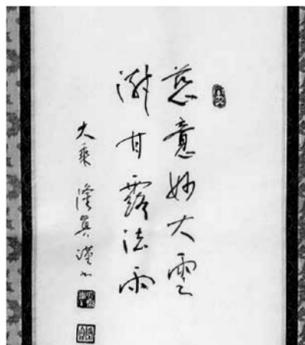
月舟宗胡「暫時不在如同死人」

の「一」の中にもきちんと造形物がある。吉岡 ほかの書を見ても、天桂さんはあまり破天荒な字はないですね。吉岡 そうですね。平川 そうですか、とてもスマートで。吉岡 鋭いような。平川 何か「一」の中に力強さもあります。藤木 この方も江戸期になり吉岡 江戸の初期です。やっぱり曹洞宗の道元禪師からずつと伝わってきた法を、ちよつといいかげんになつてきたときに、もう一回道元禪師へ戻そうということで復興運動をした人です。金沢の大乗寺の住職で、お弟子さんが全国にいっぱいいました。曹洞宗では月舟さんの字が一番多く残つていて、あちこちの古いお寺へ行くと、山門の額とか寺号額なんかは大体月舟さんです。この人の字は豪快です。読みは「ざんじもあらざれば、しにんによどうす」、しばらくの間、わずかな時間できえもちゃんと自分の意識を持つて前向きにやっていたかなければ、死んだ人と同じだということですよ。とくに修行

のとき、ほんやり坐禅していても目を開いてちゃんとやっつかなくちゃいけない。これは厳しいですね。暫時も在らざれば、死人に如同す。ほんやりしていたら、死人と同じだよ。藤木 はつとしますね。吉岡 月舟さんと風外さんは同時代人になりますか。鈴木 風外さんのほうが五十年ほど古いですね。平川 これは難しいですけど、豪快な感じがあります。言葉もちよつと強い言葉ですけど、例えばもつと優しい言葉の場合、優しいタッチになつたりしますか。鈴木 どうでしょう。吉岡 それはいろいろあります。私は月舟さんの「喫茶去」というのを持っていますが、お茶を召し上がれということ、優しい字です。少しは文言と比例して書くでしょうね。鈴木 日本で一番、書が多く残つているということですが、これは人気のパロメーターだと思います。やっぱり、あの時からもらった書は素晴らしい、というものであれば残ります。あかんとなつたら、いつの間にか消えてしまふ。月舟さんはもう三百年も前に亡くなつていますが、当時の大乗寺は



鈴木深州師



東隆眞「慈意妙大雲謝甘露法雨」

ころが結構あります。この達磨図はバランスよくできていますけれども、全然そうじゃないものもある。だからそれを評して、それが当たっているかどうかは別にして、風外さんは茶を知らない和尚だ。それは一つの褒め言葉でもあると私は思っています。

書を書いた人の生き方を学ぶ

鈴木 風外さんについてはもう一つ、晩年近在の農家の方に銭青銅三百文、というのはいくらにの価値か分かりませんが、それを渡して何を言ったかという、俺の身長を穴を掘ってくれと。和尚さん、それを掘ってどうするのかと言ったら、まあそのうち来てくれれば分かるよと。それで穴を掘って、しばらくたってからそこへ行ったら、風外さん、その穴の中で立ったまま死んでたといひます。まさに最後まで本来無一物をまっとうされた。そういう禅僧はいないというので、奇僧とも言われていますけれども、私は曹洞宗の継承の、正統の生き方を貫いた方ではないかなと思います。

道元禅師じゃないですけど、学道の人には貧なるべしと、それを求めなければいけないけれども、実際住職になってしまっても、なかなかできない。それが、この風外慧薫、あるいは雲溪桃水、あるいは良寛さんという、野に出てそういう生涯を送られた。でも本当の僧侶じゃないかと私は思うので、それは曹洞宗の禅文化の大きな特色と言える。

それと併せて、今われわれは風外さん、あるいは道元さんにお会いすることは当然できません。ただ、墨蹟に相對することによって、道元禅師さんや瑩山禅師さんや月舟禅師のその精神を受け継ぐ、まさにそういうような気持ちで見るといふのが、墨蹟に対しての一番いい見方だと、とくに僧侶はそういう気持ちで見るといいのかなと、これは吉岡会長もよくおっしゃいますね。

吉岡 そうです、書を通して、書を鑑賞すると同時に、書いた人の生きざまを私は学んでいくということ、それが大事ですね。今やたらに新しいことばかり言って、古いこと、昔の先輩方の生き方を学ぶと

近くの農民が来て、その絵を持っていく代わりに米一升を置いていくとか、あるいは野菜を置いていく。ということ、そういう絵が小田原近辺に残っているらしい。

鈴木 たくさんあったようですが、非常に芸術的な価値があるということ、金銭的に急激に高くなってきた。ですから、昔から伝来したもので、間なんかは掛けていたものもだいたい流出してしまっただけで、物館とかそういう特別なところに収まっているものがほとんどです。風外窟のある上曾我というところに残っているのは、今では三つか四つくらいだという話ですね。小田原に住む野地さんという風外研究家からお話を聞きました。

そういう風変わりなお坊さんですが、実はそれだけではなくて、そのころの城主だった稲葉公という殿様から、そんな和尚さんがいるのであればぜひお会ってみたい、そして自分のお寺を造るから、もし会うことができれば、わが菩提寺としてお願いしようと思いがかった。普通なら大喜びでしょう、ところが風外さんは違いました。そんなこと

ということが希薄になってきました。物でなく、精神的なものを受け継ぐ。僕もヨーロッパでピカソだったりゴッホだったり、そういう作家の絵を見たときに、その作家が描いた距離、キャンパスと自分の距離というのを感じて、もうもちろん亡くなっている人ですけど、描いた人と出会ったような感覚を持ちます。この人も同じようなことを考えていたんだとか、そういうことだけでも、本当に物としてじゃなく、精神的な部分でつながっている部分があるのかなと思えました。文は人なりと言いますが、書もそうですよ。

藤本 なるほど。そこまで読み込んでいくことが大事ですよ。

平川 書に限らず今は何でもパソコンで、絵もペンタブで描く学生も増えていきます。実際筆を持ち、文字を書くということが減っている。これからは本当に筆を持って墨や絵の具で描くという、そういう体感するよな、本当に人生とともに歩んでいくよな仕事、事、がどんどん減っていき

まいそうです。ですから、きちんと物質だけじゃなく、その裏にある精神性といったものを伝える場として、禅文化というのはさらに重要になってくるのではないかと感じました。

東隆眞
「慈意妙大雲謝甘露法雨」

鈴木 最後にご紹介させていただきたい書が、先ほどから何回かお名前が出ておりました、大乗寺現住職の東隆眞老師のものです。これは東老師が今年、大乗寺の住職になられて十五年になりますけれど、晋山式のときに関係の人々、有縁の方々などに記念品として差し上げたものです。

この下のところに観音様のお姿が、それは実は印刷でして、何かという昔から大乗寺には観音様のお姿がいろいろある。それが非常に大事なものだということ、大乗寺の宝物として重視されておられます。縦が百六十六センチ、横七十二センチで、寛政十二年に大乗寺の住職四十三世の無学愚禪大和尚のときのことではないか、ということが彫り込んであります。

その版木から刷った絵を小さく印刷して、そこへ東老師が「慈意妙大雲謝甘露法雨」という、僧侶であれば誰でも知っている文言を書いたものが入っています。

吉岡 現代宗門人の書ということで「話尽山雲海月情」という屏風です。「東老師の書は龍が水を呼び、虎が山に棲むよな勢い、縦横無尽、自由闊達なものを感じます」と書きました。

鈴木 私は東老師のおそばで書をお書きになるのを何回となく見えています。外国で書いていたのを見えています。日本

書は素晴らしい、自分のところで大事にしたいとおっしゃる。まあ、東老師がいろいろな文言を選んで書かれるものだから、私はお世話になってから言うのも何ですけど、やはり人気のパロメーターというのはまさにそれとおりで、と思います。

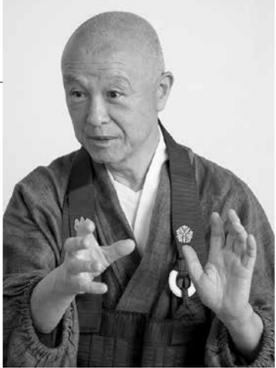
老師の書を欲しい人が多く、字自体も非常に人気がある。現代の禅文化をつくるお一人の中に東老師は間違いなく位置するでしょう。現代の僧侶の書として、今日は紹介させていただきます。

吉岡 「曹洞禅グラフ」の昨年夏号で、私は東老師の書を紹介しました。

藤本 そうでした。

吉岡 現代宗門人の書ということで「話尽山雲海月情」という屏風です。「東老師の書は龍が水を呼び、虎が山に棲むよな勢い、縦横無尽、自由闊達なものを感じます」と書きました。

鈴木 私は東老師のおそばで書をお書きになるのを何回となく見えています。外国で書いていたのを見えています。日本



司会・藤本隆宣

曹洞宗の中で名だたる僧侶を輩出した、最高のところだった。なおかつ、永平寺の住職にはなっていないけれども、曹洞宗をまさに復興された方ですから、多くの書を書かれて、そしてそういう素晴らしい方だったので現在に伝わっているというので、この書をよく見ると、相当傷んでいます。ぼろぼろです。率直に言って。普通ぼろぼろになるともう駄目だということ、それこそ処分してしまわなければならないわけですね。ぼろぼろになって素晴らしいものがあったら、やっぱり代々の所有者が直し、直し、直しながらこういうような姿で現在に伝わっている。

吉岡 紙を見れば、その当時の表具じゃない。何度も表具を直している。だから元はちよと大きかったでしょう、隅を切り取って表具を直していきまから。実際、この人の書は多いので、風外展をやったのなら、次は月舟展をやってもいいと思っっているくらいです。

風外慧薫
「自照図」

鈴木 これは「曹洞禅グラフ」の前号(二〇一七年夏号)で吉岡会長が取り上げられたものです(同号二一三頁)。風外慧薫は室町期のお生まれ、そして江戸時代の初期にお亡くなりになっておられる。先ほど雪村の影響を受けているというお話をしましたが、雪村さんも小田原周辺にいたこともあるということ、もし



風外慧薫「自照図」

かしたら雪村さんのものを見たり聞いたりしていたのではないか、その可能性も今指摘されています。

「自照図」というのは自画像、ご自分の姿です。これを見ても、ひげ面も頭も剃っていない、まさに仙人かと思えない姿で、本来無一物としての生涯を送られた方というところがよく分かります。群馬県の碓氷郡というところにお生まれになって、渋川市の雙林寺へ修行に行かれた。そして、香として行方知らずになられた。

その後、小田原の成願寺というお寺の住職に座ったものの、何があったか分かりませんが、お寺を出てしまっって、小田原の上曾我というところの洞窟に住んでいたという。洞窟に住んで何をしていたか。ただ鉢鉢したり、坐禅しているだけ。穴に住んでいるので、穴風外といわれた。けれども、それだけでは生活ができません。何か、もともとこういう書画を描くのは好きだったよう、達磨の絵とか布袋さんの絵とか、あるいはご自分の絵を描いて、洞窟の入口の木の枝にそれを刺して置いた。

吉岡 そうそう、そうすると

近頃の農民が来て、その絵を持っていく代わりに米一升を置いていくとか、あるいは野菜を置いていく。ということ、そういう絵が小田原近辺に残っているらしい。

鈴木 たくさんあったようですが、非常に芸術的な価値があるということ、金銭的に急激に高くなってきた。ですから、昔から伝来したもので、間なんかは掛けていたものもだいたい流出してしまっただけで、物館とかそういう特別なところに収まっているものがほとんどです。風外窟のある上曾我というところに残っているのは、今では三つか四つくらいだという話ですね。小田原に住む野地さんという風外研究家からお話を聞きました。

そういう風変わりなお坊さんですが、実はそれだけではなくて、そのころの城主だった稲葉公という殿様から、そんな和尚さんがいるのであればぜひお会ってみたい、そして自分のお寺を造るから、もし会うことができれば、わが菩提寺としてお願いしようと思いがかった。普通なら大喜びでしょう、ところが風外さんは違いました。そんなこと

を言われても、自分にはそんな気はないと、ただせつかく殿様にそういうお話をいたさないで、行かなければ失礼になるからということ、お城に行つてしばらくお待ちしていた。ところが、お殿様が忙しくて顔をさなかつたため、そのまま帰ってしまったといひます。

稲葉公は非常に残念に思われて、風外さん自刻のご両親の石像をお城の中に奉安されていた。今、墨田区の弘福寺というお寺さんに稲葉家下屋敷にあつた、風外さんご両親の像が残っています。この風外さんと残っているのは、近世禅林墨蹟、曹洞宗の墨蹟中では古いほうになる方ですから、今もそんなふうな大事にされているということですね。

達磨図の意味
余白の意味

鈴木 ちなみに、ドラッカーという著名な経済学者がいますが、あの方が実は日本の古美術の収集家としても知られています。その彼が最初に求めた禅画が風外さんのものだった。風外さんといえ、今であれば知る人は知っていますけど、ドラッカーが買った

時分はだいぶ昔です。多分、ドラッカーは風外とはどういう人かという、そういう認識はなかつたかも知れない。ただ絵を見て、これはいい、これは素晴らしいと。

実際、十年前か前に風外さんの描いた達磨、あるいは宮本武蔵が描いた達磨、その当時、有名な達磨の絵を並べてあるところで展覧会をやったという。作者の名前を隠してどれが一番いいかという投票をしたときに、一等に選ばれたのがこの風外さんだった。それ程、風外さんの達磨図は素晴らしかった。そういう人ですが一般にはまだまだ知られていません。来年は生誕四百五十年ということですから、風外さんの遺墨展などをやっていくことで少しでも頭影ができればなと思っています。

平川 お話のように達磨の絵は多くの方が描いていますが、これは描き方というのがあって、中世の牧谿という、日本でも大徳寺などが所蔵しています。ああいう人たちが水墨の禅林墨蹟の先駆者というふうになつていっているのが風外さん

です。

平川 風外さんの達磨の絵を見ても、あの余白が印象的です。余白の作り方がうまいといひますか、余白と図の関係というのが何ともいえない絶妙なバランスで素晴らしいなと思ひます。

吉岡 そうですね、いい指摘です。余白、私らですと何でも空間へ書きたくなっちゃう、贅をね。

平川 余白というのは日本独特のものなので、僕が書を見るときも余白というものをすごく大事にして見えています。もちろん表具をするときに切つたりして、書いたときはだいたい変わっているかもしれないが、こういう余白は今の画家たちにも、また西洋にも大きな影響を与えています。

吉岡 贅とか落款の打ち方もありますね。風外さんはそういうことを意識していたのか、無意識に押したのかどうか分かりませんが、余白というのは人生でも必要ですね。

鈴木 そうですね。平川さんは毎日、日課として空の絵を描いておられるとのこと、それはまた脚光照顧という意味で。

吉岡 余白のある生き方ね。鈴木 禅画を見ることによつて、そういうところまで思いが及べばいいですね。風外さんの絵を見てある茶人が、これは茶道を知らない和尚だと言つたという。お茶をやっている人ならある程度、ところが風外さんはそういうところを全く考えなしに書いてい

仏教企画通信

ご支援寺院名
H29.5.1~7.31

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	正信寺	10000
合計		10,000

手まり学園

寄附者御芳名
H29.5.1~7.31

所在地	寺院名(個人名)	金額
神奈川県	青木義次	6,000
東京都	田中洋子	2,000
埼玉県	曹源寺	10,000
東京都	山本峯也	30,000
愛知県	永澤寺	10,000
山形県	天性寺	5,000
岩手県	大光寺	10,000
愛媛県	高昌寺	20,000
静岡県	龍雲寺	5,000
東京都	砂金智佐(78)	3,000
静岡県	宿蘆寺	10,000
岩手県	長福寺	5,000
神奈川県	青木義次	6,000
宮城県	繁昌院	10,000
神奈川県	正信寺	20,000
神奈川県	青木義次	6,000
東京都	砂金智佐(79)	3,000
青森県	宝積院	10,000
東京都	砂金智佐(80)	3,000
神奈川県	青木義次	6,000
東京都	砂金智佐(81)	3,000
合計		183,000

仏教企画発行の刊行物

(*部数により割引があります) すべて税別価格です

『修証義』 解説 丸山劫外著	1,400円*
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著	1,200円*
『まんが問答一期一話』 文 平和宏昭まんが 垣内敬遠	1,200円*
『道元禅より見たる般若心経解説』 長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』 長井龍遺著	30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著	500円*
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説	300円*
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著	140円*
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著	150円*

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ	
発行日	
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み

〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

*ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。

苦小牧駒澤大、中国系学校法人へ 移管譲渡、学生提訴

学校法人駒澤大学が今年1月、苦小牧駒澤大学を中国と関係が深い「学校法人京都育英館」に無償で移管譲渡することを決めた。すでに協定書を交わし、文部科学省に設置者変更を申請、許可されれば、苦駒大の名前が消える。京都育英館(松尾英孝理事長)を設立した「学校法人育英館」は関西言語学院(京都市)などを運営、中国・瀋陽市では、東北育才外国語学校を設立・運営している。ホームページによると関西言語学院は日本語学校。在籍する学生は昨年7月現在で510人、全員が中国人だ。東北育才外国語学校は東北育才学校(瀋陽市)と共同で設立した中高一貫校で日本語教育を展開。東北育才外国語学校から関西外語学院、そして日本国内の大学へというルート構築してきた。

5月8日現在、「学校法人育英館」には中国人2人が理事に名前を連ねている。この理事について1人は中国共産党員だった。理事の顔ぶれから、中国との関係が相当強いのが分かる。譲渡されるのは、苦駒大の敷地15ヘクタール(10ヘクタールは苦小牧市から無償譲渡で、5ヘクタールは無償貸与)と校舎、図書館(蔵書数10万4千冊)、備品類で、全て無償だ。総資産は約40億円で雑書類や備品を加えると50億円を超えるという。協定書によると、移管日は30年4月1日で、「教職員の人事異動や給与、その他の変更等、管理運営については一切駒大は関与しない」などとなっており、全て京都育英館主導で運営されることになる。現金をともしない完璧な「買収」だ。

移管譲渡について地元メディアに期待を寄せる。一方曹洞宗関係者は強硬に反対している。譲渡先決定への課程が不透明だからだ。移管譲渡が公にされたのは今年1月の法人諸学校管理運営検討委員会と理事会、評議会だった。出席した理事の一人はこう振り返る。「須川法昭理事長が突然、苦駒大を京都育英館へ移管するという声明文を読み上げ、移管協定書やスケジュールがまとめられた分厚い資料が配られた。全員、寝耳に水の話で、こんなに準備がそろっているのか、と啞然とした」全てが極秘裏に進められたようだ。須川理事長は、記者会見で、入学者減による財政状況の悪化を挙げたが、その後は沈黙を守っている。

移管譲渡をめぐる苦駒大仏教専修科の学生8人が7月10日、国を相手取り、大学設置者の変更を認めないよう求める訴えを東京地裁に起こした。原告らは訴状で「京都育英館は儒教の教えを建学の精神とする大学を運営しており、移管されれば住職の資格が取れなくなる」と主張した。また、学生への説明義務違反も問われている。駒大は「訴状を確認していないためコメントできない」としている。

駒大は、どうして突然、中国と関係が強い京都育英館への移管譲渡を決めたのか? しかも、無償で。苦駒大の教

育理念はどうなるのか? 宗門関係者はいう。「疑惑が膨らむばかりだ。中国は京都育英館を通じて、駒大本校にも進出してくるのでは」という不安もある。曹洞宗寺院の最高議決機関、宗議会は、移管譲渡の白紙撤回を求めている。(産経新聞6月19日朝刊、7月10日朝刊から抜粋)

イアは、京都育英館と中国との深い関係を好意的に捉え、新大学設立に期待を寄せる。一方曹洞宗関係者は強硬に反対している。譲渡先決定への課程が不透明だからだ。移管譲渡が公にされたのは今年1月の法人諸学校管理運営検討委員会と理事会、評議会だった。出席した理事の一人はこう振り返る。「須川法昭理事長が突然、苦駒大を京都育英館へ移管するという声明文を読み上げ、移管協定書やスケジュールがまとめられた分厚い資料が配られた。全員、寝耳に水の話で、こんなに準備がそろっているのか、と啞然とした」全てが極秘裏に進められたようだ。須川理事長は、記者会見で、入学者減による財政状況の悪化を挙げたが、その後は沈黙を守っている。